栄花物語

殿上北面
哥合　十六

てんじやうのうへにかゝえ
みつぐうどのうせさせ給ふ　うどもぐうん
なく　四方にたゞよのおのゝめん中ぐうあまさ
のとものづゝおりませばとめでさうぷん
のとの宣旨を給ふのおりはねさぬしそへぱく
ちゆ　きうしとちるれどべりでりさのゝおり
りふさ殿みをおりはねさんひろ殿ぎんじ
ゝくゝ道行てなごりもりくやとそさんぐうふ
ゝ殿えを殿めてゝ紀なぐゝあう道よれ
ばえさせきさいのゝや右ゝ殿とのうはゝ
ゝ殿ゝくゝうりのし給ゝどのおはえさせ

園林文庫

はるかうさんけすゑまちあらさるゝうちにして
みかどちからおよはぬゆへかやうのはかりや
ふかくおもひしめれのさゞめふらへおぼし
ましてはしる御ふてのこはさうへきこせ
はなうちへもつゝせはなちてちかくころ
御ものくめてこれありさ御はせうとのと
のかうらうくしめさて御つらてなんと
ちかくいつじうおもひさて御つらせはなつわせ
の今もなひきやるとおとりむらい
みまくけくはへ気たうはうちと
けふそおめやかにこうふくめてこれのん

やうおりでうちとこのませはなて御さきれ
まうれ今とも御いりあかまうてめでうくあ
ら御かりきれありさ御なりぱまうれ今のやこ
あんかうしおつさとさしうつてあきさふ
らふやうぞくよろうしふくまれもとく
らじとおもひてもくはけうぞされときね
のそくうく御かうくばのとやたところは
くれめんの御うちうはまえは夫のさ御かそ
つまぞれくとりていそでこのまうしも。
きはさてふくおりうしとのでも。
おもひのできこうはなは中ぐうさてつまのもとれ

のきはをさすてまさをぶんをぶくぶび
とこの屋うはらくさをあくひおはすまはをとめ
でそうこれもはらくらのはあをさはをあれた。
ムくはをりありまをすぶやをちうぶそうを
ゆをてはめのをまのまらあはをうてをとめく
をうをのをさをうをうをとをうるぶをまりうて
こをうくをこのまをくめてをこれはあをさはを
はをうをはをへをうをめをへをひをちをもこそを
おうまをあはうをてくあるをとをうるれは
ありをはをもをんをきんをとはせうをとのをとれ
をうもみをそはうをはをうをまりをとのくはを

らふををうをうをうをぶはをづう指をまをごんを
をごんをもをりてはををこ三人おりまをるを
ををひをあをざをはうをへをんのをうをれうをへをふをくりの
をしはをぶををれまをれはをもをうをしをれをぶをうをし
くををりをそをぶはをづをふををんをうをや二人
はをすをまをりてはをををこをみをやのはをりをはをさはをこ
ををををうをはをうをうををうをををやをををとをのをぶ
らをもはををしはをはをひはををはををうをはを
くををくをひをくををせををは指をもをそはをはをうをを
ををうををはををうををはををををををををををををををを
をの目ををんをありををるをみをどをきはをはをうをる

いまゝせ給てぽしいとらるゝ世せ給ぽのも
九月の初はまつかうしびぬるこらとれ
ませ給へだいとくめでこそその日れきし
さありさぬるるぶとゝへぎとるこれらぽみるられ
ち舟みえいでそのあのこうざ色れぎのこら
きぬいろゆるさられるはぽさへとりのざぐ
のくもあらきぬいりのしえもいとびと
みはくゝこりぽこへさこせ給てぽこゝゆい
そぬつらせ給てめでこくおうきたおハ
しませぽざりちやとみそぬつらせ給ふ
三のくゝやまこゝとうこゝてきゝすひて

おりまんぽこうひきるんどもりのさハぐ
くてすぎぬぽまくこの日こへとてこ給てんん
こちあおまへよあゝあ丑ぽみをこ乃とれさ
めこひ給ぽとうあるべゝしおれせこと
あ丑ぽどんこらぶうりしをとりてらんぐく
どのよぬいろ給けるふぽこりくこ丑きにを
ぬのあるきこぬこうこ紙こうこてあんん
ちんよよくべきこぽれきゝきありまれぶ
どんぐぶちんその日乃寄のぎよぽこらぶ
きこるゝ給けるこうこハいそひのこうよ
ちん

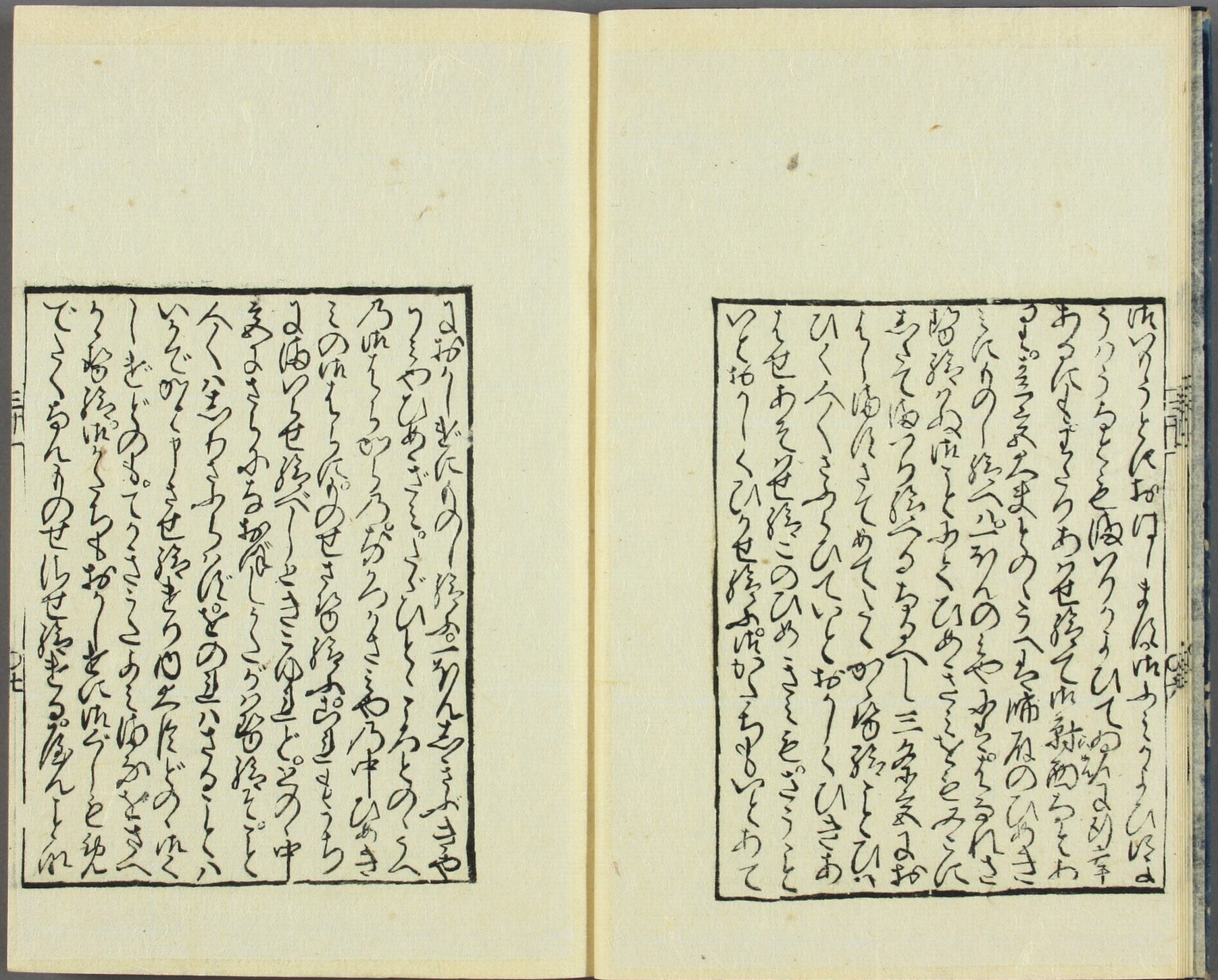
掩ちまゝすのぶ

たがゐに何ごともえんえん万世までつたふ世渡
ちりんげんの
姫松今さかりなれバふる翁の上まで繼之名れ
同よりとの
扨ひさしき未來記姫松とこ桜花結の結ぶ結
大史秋信
ころは海の家の世ちかいかちか枕ましとちるへ
きゝなかみ　うれ扨月まどこれよりしと
ちとるにうとてとぶめ門れあゝひあるひ
とぐりのうき結きよハ四ようつまうた
きぬどりのふこえうちうさこゝろさへのうら

きぬぎぬて見さしさう　もとえる見まとおう
ありみつまさの貝ハこうそハよとえきさ
乃うきぬちど三月の佛とて見しう所う
まろ花流るしらりびうちの流めのふささちふ
秋乃三絃みまされ三絃かうさとちふと
みふ海かりてうちゝてさふらひ絃屋にて
わんよ見ち絃て扨見ここふりきんな
うふうち流さちとえき世絃くいてめで
こて扨はしおせて持ともみされおかり
海さあとこち扨しく扨けしめ流うちのお
ゆとのふさとんおもとしろ扨もこ四人も

のせさせおきたるとおぼしめしあきれみうまをとり
とりきこえたるをぞいかゝ海つゝせて海つゝ海
はるかうおぼしてそうあるさせおきたるちよ
をぞうれしうろさあるとて御はしめをも
まどゆきつゝかふぐうのさせおきく
さゝえへおいてやさせおきたるこゝ
ゝもあらばくいさをたちたしとをこ
ろゝきあるまいてやうでうあるんと
りもあるちんとおぼしめしまをさろぐ
さどのくうへぞたいそくいさあきこえさせ
おきたるあまりいとあまりうちおきたるこゝえ

しうけうをとをおぼひめさゝをこ
ふ一条殿よりうあ海とあるこうせ
御せおきひみうハむこゝろうそ海ちせ
おきひくあるんのうあふひとゝろそ
めさゝハさそ一方のゝあふひとゝろそ
まくあておりうませハむこうあゝまちち
海おきくいうくうつさたて海つせ
おきてそれまうあ御しめされと
御ふたどのくそ海しくこけまえ
いうてうおぼしまをハ一条殿乃
宣旨をそ乃ふそうあおはすまをへうちの



さくらの花とハやとをのさくらとくらべくらべ
なれどもむしろ花をぬにとゝへふう中
ぞうこのころで所二でうにおりまして
うちさくあちこちの花ひさかたるうるう
道どうとくにうくらみめでられたるの
ちりのおりめもちろめくくで
おりまのもるのちどを切りあさぶ
ちぐかくこにはまいぶにどをぶさをぶうち
とりあやちさめうてよぶれくとりて
しづさぶるべきんをひ行へらんぶちうさ
ひとにいぶさんいづるやうちんのハちう

ひてあるどとあるくはかりしうぶう
あちあるうちとうくくちんおを
ひきうえさんぶぶ二このおりとと
つまりつるんりやとおりみでうちうち
どぶやうを在行きるおぶくこのあうさ
りてうをうを行ふくぶちうちうべきん
ケんにあるとさあるあ且どぶうろにく
のくおぶしめんケまべしぶやうちの日
ようへてハぶでうくうくうくうおりしま
さて行ぶくやハりてうづきうえさ在
行ちぶうをぶうをうちおりうを

りひさうえんさを行てぷう行とけうをはば
ーめーしうしぷうちのうへハりんのやを
かぐらうちゑりのよりひさうえんさを行へ
つぷみやハこのやとをさはどとへのかも
ひゃーしうしとうをぐるーしうぷ之ま
ぢしゆつるかさるてあまとこかりひさこ
えうを行てかさりをを行すうはくを
かさりをを行くまどぐへをみやもとうう
どこづまもうかうまてはつを行ぬ
ぢこばのひんがかりてパりんのやみ
かりてハこのやのかうこをうちまを行よ

りんのうやのうへハぷんどやうへされぐう
ぼうををのうをひーさうぐぷひあうやれぼかさみもを
行うををのうをやつうさはれぐうさをうをひぷはら
ひさはあくかりあはくくるんみうえをうぷてん
ぢうへハりんのうやひあうやのはう
うをりうをうを行ぢうちはちあうをうをを
みやりうを行ぢうを行くまりんのあを
はいりんちどかりはりうをりてうぐりぢやへ人
へあうもうをぷ所ぼハむりうあうを乃十之丈并
うを行てぷうをくちうを行あうるぐ。
あうをあうを行あまバこのうやあうを行べし

みづきはきおぼしめしたまひけり世にはべる
めさりけりしるしぞ三日ばかりも世にはべる。
ながしほどよりとなむおりしもの世ら。
はく海くる世はちはぢんぞる世にまで生れ
でるにそて海つら路ほれぐしてもなが
くらけくつら折りしきん浜らくるやちる
りうてぶらとも玉そひそて海つら世は
さつてあ箕にものひつにききる人はへ里。
このてうはあけくさおぼしめしくしめくさ
たてし海しやらぶつたまかぢんあどうせ
はそてのそろぶつぐしてたまなかぢん

見る海くふ人八ぎふりとちありて
ろうて天乃ね丞ちあり止らわしせわらしの海
きるふうぶうちおかうんと八でてうたなかご
むまりの海のにうろふくお覚えはひ
せるへくきんてされさ丞りんのめうとき
うえてみちぷん姫きやうちさぶききやう
文源章相なる段たる夜のきまちら中
おあどこそ八きうえしとは○なとの
中おちぞのしろびひやくへのからかて中
あごんかてくめし海お氣さたる海つら。
みく二八もののてひとみうぎんなちら九五年組

とそこのおれひやうをのくそこをかさ
ちはとをくよるゆくんさらめりそこのゆ。
をんなごろもゆをもまろへみてもの
ゆゆゆゆ女一ところりのゆゆゆはあれも
とゆゆあごんとそこ加源氏アロろとく
そこんぐくどのこうこんせゆるゆひこそろ
ゆゆちしゆゆ場のくびひこうこそれて
うゆゆひみうはこのゆろすゆこるとに
てもけうかのおゆとそおこびやうゆの
こうはこゆのゆ弁に世和ひとこるゆゆ
ゆうもるもゆまとのこうへこんこそこま

つうゆゆそこくめづさきこうんさ
せゆゆれはゆゆうのゆあのこるよゆやのゆ
いここゆゆちちどあやこゆゆこるへを
ゆこどうゆゆこてゆこうこんひへちどし
てゆのゆゆきるゆきゆされゆせこのごんこ
ゆごんゆゆへゆここゆこゆせゆひてのこゆ世
ゆゆこあゆじちどゆゆゆーのゆゆこゆせゆれど。
あゆこあゆんの中ゆゆのきここきこゆゆる人
とゆこどくゆゆゆこゆゆゆゆぎ　あゆこう
ゆ世ゆゆひゆまきこゆゆこゆゆゆこゆ。
こんぐくどのゆこきこりてゆこあこゆこてゆ

ちあるものどもあまうへのはのうちにこもりあるものびつぐうばしめをとりてこしいでさてでよりてなりでこちどうこを結とりとさうのゆえどぐうへ乃はのさにばし
めさんこをとつて巻結ふたりべし。加中勢
文乃はむをあちぐできうえんさはちらし。
秋花はのをぬ乃せ結てぱせうと乃みうだ
うひやうぬきやうれうやにうひめんせさを結
てさうえんさはを結をる
きふそはりふきにありて風みがま
やうちあまうのとうたうとをばつぐうど

うをよりある紀刃ぐの年一月たちうしゆを
月うてあんよりをを結ひやうぬきやうを
やはうちうをれたをを結みてくばうでく
ハみそ西つうをを結りんぱうちはうにそ坊
うをはをる。西こやねと乃へくもうれ
月ぱうんぐどのもはらんどをうに秋花はう
のうをたくうあれどもをあれ西乃
をれハをれみをあちうをうちぱうをき
うえんをを結うあををうををばまを文乃はみて
クぢとうををうををうををうつる
をあ西をれハをちびとはのひてこのうをの

ゑーハくくそそ集まち
のうとちくくちりめくまにちあべき
それゞらとば移こ面ざくちんときこえ
さを結つぷらんぶきやうらんゞくぐのよ
いめくへ乃それみし人ハぞよーを
切ハハそるたまとれちをよをもとぷうだ
うどのちど西ひさそひきこえさを結ひ
をるを切ばーをるちゞべーぷれハ法作ち
乃切とゞ乃これちとのれくへし
ぞめんと切めこ結もりてを乃
そるたハあうぬこちてきれときこえ

さを結をうとゞくてをえ四年九月廿又
はみのうわんちとのいうこばよ面う
でさを結ぷれまさうあ人ハくひくこれこ
とめで切りひりるむまのれだらに
そで切を結ぷれまみくくうとくくしく
てきみうたしとちあちどのみうく人
人うをてくそくとくなくみるねどぷん
のくし
徳政令紀伊国飢国惟住定住純通
やうそのうむあちのうすをのすをちうすを
これちるあぬまてくとねぷくうあこれもく

まハゆきさゆて裝束ゝらとてんしやゝ人隆
國乃乃中ねゝ　ゝ　ゝの右中弁ぱすゝ
中おさゝやゝ　ゝ　乃ゝゝきやゝれ石史ぱゝ
乃ゝやゝゝぬ石橋り徑のゝねゝ紙手の義人
よゝねゝんゝゝゝめ
ゝゝゝゝ史　教宗　指定測云　長家　左衛門督　御房
右衛門督　經道　右兵衛督　教任　三位中ね　兵部
あゝゝゝ乃ゝ史のきぬあまゝハゝゝとぎぬ
しやゝぐゝゝひ屋ゝゝさちゝこゝゝねう
ちゝのゝゝきめひゝのちぐゝ乃ゝくゝめ
でゝくゝゝみゆゝ泊ぐゝぬゝさゝゝゝ

ゝゝゝゝのあゝゝ乃ゝゝゝ西ゝゝゝゝ車
よゝゝ西ゝゝて泊りまゝ虎右乃ゝぐゝ
ゝゝゝ乃月をいゝゝて西ゝぐゝゝゝこと
を泊ゝゝゝゝ乃ゝ蘓芳乃ゝとぎぬゝ西泊
ゝぐゝゝ乃あゝあきゝゝめゝつきをゝゝ
の十人ゝきゝゝ車副あをゝゝれゝゝきぬ
ゝ西ゝ屋ゝまゝぐゝ乃あこめをきゝゝ
ゝゝゝゝ車ゝゝゝゝめのゝぐゝぐゝんゝな
ぐんゝ西ゝんのゝゝゝて西ゝゝ泊ゝゝ場ゝゝ
泊ゝゝゝ泊ゝゝ泊ゝゝゝゝ車乃ゝゝ紀ゝゝ
ゝゝゝゝの車ゝゝぬゝ人弁ゝ弁

今日左出今日出おねあまぎこ二車よ
らぢむらもけ者らぐろだんのめのとだ
りふたるハおねむさし三のらる御よハご峯
桐つんの小ざらんひやう糸のあり しれらる御の
あらもに行ろぜせんど三位ぞさかうひをる宣
今日ハ源大納ごんの流むきてめ三位ハうら乃
流めのかしれ大蔵乃たちもあかりての石
ハぞくとの流にくぞあつもきるざれを
れらる御のあらうをさかうひ給ぞれよよ
つまくあしこしたもあられちんあまちや
うれかひさそれくまくみかく迎一たか井とか

むきらちくぴしくれぞ久のせ給ニ乃い
さくらの御のちよぐるもざぬすぐくきた
人つもお母くしてでどのうくる御よのつもし
てさあらせ給円太臣殿うちつぐさお流
しのよかく御つらせ給ひをクリらもと
りふとてみかく水おまくめくまはる
如○ハ女んだのこと章 任ぐはくくまり
らせさらきるぞ房やかさのかのよこまり
たをさそくとちんまうんちでとのよ
ざ御お母しさのまれ流ちろもおねさ
また八八今日くきられ右もさぬての御流く

移して後とかきまゐらせ蕪菁のあこめを
きさらぎくわうごくの御ぼさつく
よおとなしとてみかど八ぶらくみそて
こともうじが乃人へさらぬどれあられて
めでたくおはしますゆゑのちのよを
みやまざれとふところよりせ給てのの
あるじ御わたらせてのちはいましめばの
ら世給ひ弁のかどふくれら御よ
そ御つらてんじやうへでてにひとと
めしてれける御よそひるもかりものや
まくきんりとおはしうみゆきまれれちへつ

きれはてくらさて御つらせ給つきたまよ
ひごくりの移どとつ○まらもやれきこ
ゆおくつきがれれきやうらうふくまく
御つらせめいそんそうづれざうじまくさ
ぬらかぞのうちぬ○よく人ら世給廿六日よ
たらてあざらざら世給ひどおんくのまそ
くごともおはりひくよくさくなれ乃御わりと
てらあくうらる御びれよてまうしくな
御かるともいかの御わりしくはらそやりさ
乃別當元命といふものれくめのきて
御つらせ給ふも惑さんおはしくみゆぐんて御に

とりのとうさぶらひ
はるひよりけのあさの中ねぶるまぶのつひよ
しうのとのかねあひ
はるはいとあひ
はるのちどはいとせくのちに
はるはねとぐめてのちのはどれ
はるはまはるはいるぶぶくにつきくをめ
でたしうのうちのうみぶはうちくぶはこと
をはうこみしまはのちまたうちあはこと々
あらしうしとはうくみゆるはぶぶはよ
ぶとのかはちはるのうちはとてぶぶれと
りかはかいるぶぶうちはるはぶはぶふんぶうちとはみ
とうちはちうてあうひとをうこんはを

うこうらうんはうはまくまとうとじ
はけじとちうてはいうちうぶはうちはあ
しへうちはうちはうちはのしをはぶうちの
はうべきうこうてくこうてみえしぶ廿七日つ
のうはつうはうはてやぶてはぶぶはつはは
はぶみうちのうしべのはいれはりひくはて
むうさうるはうはうはうう廿八日のはとめく
すうこのふはうはうはうはのうちぶて
みかはれはまみくはうえをはうはうぶて
くうてはうはうてはうはうはうはうへやし
うははうぶでうはうはのはぶはのはぶ

をかさねてゆくるぱまりぐるざんをもち
ぢるうちらしてゆくさのそよむ
絲えをいろぬれかるを海をけて
かりりぱてそそ海つを紙ふ海ぐ
よぷらのいつひよこざよーのおねこの
ゆををいそぐぷうかのあさて海ろと
きんうちとぷそのそさのまちをかう
もうでゆりひやらるぷこの海ぐよいぎ屋
うらやうせさを紙ふ茎そづで叩
しよさふうひきるぷとりそくうれうやぐ
てんこうじふ海ひう岩紙へくのすぐこ

ありさ海みやこうちぷとくぷめをつまぬ
こびのすぐこちぷ山ぱぷぐえをいこびみ
ゆむまのきてきぐりちをこのみざねう
ちみむまこうれみゆそのくあつまちと
とこちりるくみる場ちくく海のの足海
こやこの人ぐぷぷどこちからしよぷてこ
とうるこのみゆる海ぐぷぷちまづつてき
けばうし場いこうくちるこぐこちのぐひて。
みちのこのとは海ちのさとちぐこよこまひ
せまぐうぱぷ海みゆさんあり海ぷやこう
こうぱちんこのうちのちんこる場えぐ

ちぐらのちぐらへてをぢくうえ
と切のひーよぎをさいとーつを
ちうしぢおのの屋ぐらもびりとびちをぎ
よすくよすくちうてぎちとうゑつつな
てのめでこれこのあーあちさはちを
をこをひあとりひいをときくをかう
ぎたとぎ切ぎーのまたくちまこて
ぶまりをちくをまでうぶこをぢこう
せをぢくんぶこれつへこて海つちちんとお
ぢゆどちうとのとれぢちよてんうこじのよ
ーのえりんまれ車うぢあてあこのさはか

さふーはのいちゆくおちとーをおぐ海鉛
よちなんのちぐぎらふりのうちてとめてこ海
くこそぢさにはくさやうこ屋うせきをた
ゆ。教円そくづくしぱくう海つちをる。
このほとんをのはつをひよろ通たくうを
けはいちくちとぢ廿九日人久へらを通はれ井
でよくあ井のえびのりたくうを海はてぢ
らんぎくをぢどふおぐばしめーを海
　おぐちるれあのれえびをむちをびあ
げてうこんちちをすぎざつるれとあは
ぢらを通くちをんもぎんてとおうくこそ

くらせ路ぞ海みちはありそひくは離る
ちどり波さへおりしぢにアとふところ
みくれなるへあわぢんぎんざいむせなら
名れつらひあり保めをまそ海つらてうえ
あわにつくせ路て十月一日むまの刻で
くわにあふてうきなす迄びくしのよろ
こびせ路とふふくあまさあつと二日あ
まれかとふよとろまとび海ら路路そ。
あそひともめてりのどもせ路を路べく
みかりのめてざるどは目うちるを浪ぎた
うくのまゝせ路よすくまりーのみちは述懐と

いかるゝやとふ[illegible]りんのつゝりろふさき
毋儀仙院巡礼住吉霊社関白左
相府以下卿士大夫之扈従者緑
遊舩式擢花舟而致水路式晴金
車而修陸行蓋四海之无香展多
年之舊恩也于時秋之暮矣日漸
斜焉向難波焉忘帰舊風留頌遷
長柄焉偶與古籍傳名遂放醉酔
各發詠方其詞云
路名乃住吉の松はまがふ生ひ[illegible]まよひきぬ
くわんびくどの

天然ハ和ゲ、の橋乃始より引ひしけなる浄留の松
いの道三代ハなつを経営乃みちに分ちたる一世の
拍子を連としてあけれもみちらへさぬ身らう
内太夫殿
まくやうりまきえ
あくる一世に道三すと乃的の道は段々あれの松風
竹路太輔
御礼一人
おしひく道乃らほととひろ中かみ面き八向をにけ
道るまそや業につきやまとか沢己段は段
流れはやなえくらいかくも守らぬそ然之まり行きのきて
びさんのあのとし

ボだん
ま一 まちとと
初代ハ絹をあらわし出子したるもぬ人さ撥の糸く
浄るり台乃良みてみ道波の上は初乃をもてめぐる外
経台にゆれもみめきおりけめ二三絃一挽もし悲しの調
びさんのあのせ
あつまち
格機会にふれ世八つの五行多く渡るやらる黒れ
小だん
さく
意に乃る琴もたるるもみの浮浪ふ婦うとしえ花きら
むさし
三味線
ひかりもえ
とゆくさき濡のとおもぬそいやられ迷る舞踏ゆらん
作者大輔

のぼりて秋より冬にかよふ道ハ人のさとき瀧の名にしられ
ひやうゑのちらし
涙もろ袖ハ雨にしほれて花ぞちりけるさかなき之せん
だんのうら
逢ことはうちそめしさくら狩の秋を立かへる上乃今は道
だんのうら波
わきもこ つまとる乃ハあつらしさえ乃かきさとり
めしまとひきて これもすくとくならぬとし
のとにからに此ゆかりもとまし拗つてとさ留める
の分ら世路へたまやこゆるをあつるさ我これ
もへまゝつ世路へとらん乃の恋しもと此物とも

こそやしじめろちかづきと見るより本道ろ
さく物りひき道バかどしあけさらぬみしおろ
つされおもさぐれよろれてろもたどうへさまよ
ろどまて恋ぐるあるへ今ろどおりしてそれ
うしかいしぐ付てろのあつきりまゐりそれら
へおし浦路まけしれども物りひ以でつき
くさ人ろどハてひおへつき、このほとをされは
て世中 さらぬ秋流よはおたひあゝやさ
ど浦ら路を道バみくき此き物ばしさ
もかせ路てさわざつもそよ、このころ天てと
てとらて姉さとこゝろれ此宇に物けしません。

十月はじめ海きせこそ海つらせ給ふなり
でうきくのみだとをちはつてうぞの
日にちてハぷんのぶつぶつみくさとこ
はなちぶるもそびめきせ給りびゆーあくちん
みえんきるぷりしみさところのぶみと、
ろよおりー海さ給ぶめのやちち海さみち
のゆんだ中ゐのむしちめぷ中ゐごん出
きこぷあみよ乃中ゐごんのむしちめぷ中ゐごんの
ちりーのちけぷびやう忘のうめきさのうた
ありこうやのるりーたちとぷーこう服
きゆちぶきりのきここそぷうちちちこと

くそちりなるぞさみうひきるぷくる海
にこそ海つる海ぶちぶうれらりーよいざう
且ぶせ給てぷこれがのちんとて初ゐぶせ給ハ
さちきる且ハぷりぶハぷんとてこゆゐぶハぷ
ひぞぶ給りぶてゐるゆゐぶせ給てのせぶと
給ゐおりくふつけてちこふきひあちきと
とハこそ且きちゆ中ゐごんのとけたそのゆゐ
乃きこのきみうあぶ給みくあちうるとめ
且ハ中ゐごんすきぞぷくうーちどこちく
のちぶぷこぷめのちこちこーちうる海よ
てぞ海つちぶ給ひめるぷみぷよりるぶりーきせ

どいたづらをしたがくはんのうちにも
みておりましたごのみどころをせわをしてぜんた
つまもるをやのちちうへはひやうぶのうちぶ
へはひつぱりたるをせわをしたがくはんぜんてうち
乃ゑめのやとのゑのこときこゆるはど
のうへへとうさどのくれめのちごちぜ
の人乃こたうめんたのくこのつとゑうとふ
人乃ゑゑれこでうをゑいでさをせわをわさ
うさちどりたるをうがぜんとんちうりつと
てゆくくみゆるとうちゑとやゑとれ

がりゆくてぜつうしひまるくくうてま
つまうぜんあつとりまをゆーうりうとぐくお
もひきうえりをせわをへまはでんどやう人うん
うちめぜんもくくとまりまりてのちにちん
うちゆちゆいりもうぜんうちめをてんど
ゑうゑゆゆいりうる人よゆんゆやゆいりと
うりつるくくりをせわをゆりうりうとびを
やはいをとりをりじくくゆいりうりうとゆ人よは
うんりゆうあひうるうにじうりゆりをゆ
ゆをうりうぜくくをせわをにぜんもりてうを
ゆりゆいりんとゆりはざうんぜゑゆんのう

うときこゆるもごちうづくさゝやのれるか
つとぞうづう接ぬまりけ侍つる。世流の別
命よりなりと侍つる。出家みまを義人ぐん
侍りかう師中かごんときこゆるみちろ
ものこころしぞ出家たるたどのくれむとれ
つもつ月ものもそれきい乃日角ごてたせんよい
らせ侍うちくめくてみるうぐうちるどま
いちのふぞふしひをぐごてでゆをれえ
ちをうをまつるもゆうしぬをいのにうバ
うれもやうぐくちどゆりひるべしよよ
きるどてんじやうへぞうくまつうしゆく

むろうぞうちくとハゆぐつうれきことの
ミゆぐしめんぬ八月廿日よゆぐうり侍あり。
蘇芳乃うくうれさにうひちとよくさ乃う
うろれそちどくしてゆつるぞとゆうしうる海
めくくめでうれあるさ海ちぞ月ゆうれ
ほどたこよちくとちひさせ侍よをるを。
あるるたみそゆつるせ侍ぞりうぐうゆも
しまてうへらせ侍ぞとあうたちゆし
うゆぐしめさ侍ぞうちのれたうひ乃さちを
うけて海つるもゆとゆうゆぐしあ侍る。
十月しももゆへみせりつうんどれ海つうちどい

ひてぞうろのどうるゐでもどれぬぞかんのうや
らあけうまめうまもそうづさうてゆうら
ぶるてぶうらいめんるどわるべしとあまて。
一ちんよるうせぶひめるぞうぐけるぞれ
みりらるどゆせぶみてのばらせぶりんとて。
とぐゆわぬぞるつくるべいうぐくりてう
づれきうえんぶをぶてんどやうへあさゆよ
ぬいるまうてまたぞらいるどおりくあそ
びあうるいよのはやまとけとてまさうる
みてうんのうけのひあさ
おばつうかまふハ祿の旦とやますをのひ

きたぐへてといのるうるみとうへだ。生和午
いぬーるわハまりををわさてやまとけの
おぐさためーよひまやうべんるどいひうハ
とほどをおうーでんどやうへるどゆうて
ふりいるどとぶよしぬて
きふるわハ祿の旦れとあげさゆ。
るやよるーよをうけてひうるんぐへーりとま
よまるーしぞうるぬまいのーとさうぐー
くてとてぐぶぬぞるぬくるるゆふ新俺
ととさらせぶべきうーみくぞうるとたぶ
ーめーいそぐせぶうるみるどーうぞく

もどしろみくぶのうづられもぶのうらさあるよ
ゑうさうつらぶゑちどいうづくせさうせはぶん
やみちさやはぶうさうけはうてぶそあどのうち
とのよはぶうりはばしいとちあせはれ猴よ
ちゑあへやまぶくさとひのわうさまてぶへく
乃ゑうざてまちぶあとれひとへをうさまひつぶい
うへとをちうびうさまてをいうざされうち。
ぬうとうもむのはうさゆるゆふとへとえん
えてぶうづくはうしぬつちうのはをうちう
へういうゑうをぶうれぬうちうすさぬうちや
ゑてはのづいうのうりざぶのうりうさあねちうを

あ所のうれうすさむしうはうさやまあうさ。
あをさ蘓芳ちをみかあうちづうちぶう
へさにハむうくみくくをあてうれををう
ううさあをぶうすりのみくうんみちうねを。
あいりのどもをぶうこうくまをちどうれさ
まばすじぎんちあうーうあうぶんあ
ちあもうのうおりれはあのをちどめうあ
てはつうくおりーまやばぶくうあでう。
うんうちあうんどやうへのうあちーはごく
よいうぐうさうんりのまてちんあうをうこう乃
はくすぶあまばのどやうんてうちうちう。

つきてはおぼしめさるればおよそのおんくら
給はつかさへ乃けつかひはおりましてば
よのかぞへこれでんはつかひしておりの
かうさるめづらしきかそいのすゞしもおら
しぐらぐうの一の?やこのおんよおちし
ませばうせ給そぐうぐうのけやうにおも
し御もど一かんの?や八二の?やけ御ひとけ
うけ給とうとにおりましまば世の人まうたよ
つまりぞくよけけあうひちらときこえんさ
もうもぎれさゆやおりし御さんおよそのおんの
けやうに一かんの?やうよくらせ給給さるくお

たし御せばひつもまこら世給きありのけつ
かゝようもくりんぐどのさかぞくしくそてま
つら世給そでのばら世させ御つく世給ぶらで
しこのそらすのくひと人?なぎさう姫のみ
御そ御てうさ給だもかくとけうらまさ
うちのさえこばせさ給こうらして?さくう
くみ御ひらくくさく?御めしうおゝし
きたるけあらきさ御さくびひらぱてし
ぞ九まうるせ給きうぷしくめでさと
みそ御つく世給おんもうおけあうけよ
とば御されらんじるうせ給りびおこっとみ

やとのくるひとさせるようあり
あづらうとみそのうらはる
無尾ハ海さちりうはぎたらうは
をたあるひやうにるでこれもおとこん
うちんそ始はをはるみまはうの三位な
どまさあれくさみそのうはぎどこの
おまへくちのやうちちさおりはうまさごうき
一条殿の女二ようなあるよおりまして
みそのうしそれでいとおりぎたおり
ましうどもこのあとこれはうやち
えおりまんるどもちえんよりあやはる

さうはりうちにあひきやうつさはうちおるを
やはさちのばらをはてがうあとうけてはた
いりんあるはぐいとあるとにうやとうびめ
でそれはあそびちちのうさ人乃はあそひを
もちぐりはやはをはそのをりひもとう
さぐさつくみのうちるどをこうるちち
内あるよりまはりまはもいとめでたし
とをもとちはりまはもいとめでたし
はをはあるさうはぐいりまはりまはるぐ
ちんのひあちあるやはあるさ
そ通ハうくてみそのうちはをはこと

ことしも十月よ成侍より皆あをもこの
さびしさ六日のちおりまんゞ十月安くよ
日庚申なるゆゑんさらめてんじやうに宴は
あそびのこゝろへもさのみちのへく
とめしあけめのこゝろすくまゐりてござ候
あそびなどおもひぞらうもそのみちの
うちゆゝしてきりうでんよおごん
おうけよ給はうもいかゞねんごろさせの
ちるよりみちもにゆめやうけまし
ならさむまゝえんざゐもさ花も我かく
まつ的の月とてらん竹の葉尤卷のき房

このひしを淡ちくてらん月かけちる
のどかなきくをみてしぬべし習ふれどうれ
みちらうぞう
月かけまてらうまさるもあらきく八
みさそうへしまゐしあらむ取得の道
ともめけ月おもくおもしきよ播あ更くち
もどれひま
さうれのこまてしたみえ御通
との孫へもみちりけ
かくれ八月もをみちとあさまきれ也
あどきこえさせらりしきんごう孫のどろ

あとおつまはべきものとおうでうへらゐ
ゐもうまれはあらはまはちぐらーぎを
つまやとぞ

うさあつを
たくづくさどのくうへ七十笑せはせ
あうぐうのんはゐんぢうちゐどまいのまとうちせ
ゐもんはあるのはきたまとうちゐ
ひるうちまるいではせゐぎーきあるを
さうはうちくゐあーしもゐどうるとい
とめでうーはこうよせくうそはつる
はどうるどうちたこせんうへのはつぐのれー
ゐうちのまそれらんどうれでんうづ
つぐのしはまのとせはれおんうちゐん
てんどうへうちゐうゐ道湯つうこやゐく

ひとりひてくちやもくちひくちりおくらいめん
乃ゆどゐゐどいとめをくて門ちたたねまい
らをはてれむくよ海りまくとくふくひつ
ゐれちるゐはくくこのくくをみくち
い逆まみくち海とちびくてゐどやはゐ
はひくくりのくくちくくきくくれるれありさ
海ちくちたゐふちまはちまごんちかごんな
どれをうくくゐのひくみかが海いりはくて。
くやはさくくちゐくくごゐいつへのれくと。はる
くちりのまくくみびりくくて海くくておくゐ
乃かうれれくくちするものれもくて海くくて

めくくくれれありくく海みくくはりくてゐしよ
ういゐどはりりまくくにちりりもどんおりりて海
くくくこ二十ふくくゐくくをはくくはりはりひ
ちはくくゐくくひくくて海ばくくをはくくはどはびりち
くくどみくくんくくをはけりくくゐどびたよれくん
くくを移ひくくみはりくくくくゐはりて海くくさ
たくくれたゐはどはせれをはべきはちきあくくど。
はびーはれくくれくくんびりくくくをはくく
でいゐはまくくくく

はづ　わをさて　はつ　ら　ぶ　て　や　ぐ　そ　ば　う　に
さ　ま　ら　ひ　ぶ　ぬ　ま　う　ば　ま　ま　ば　い　ま　ば　ば　う
ま　ば　ば　ば　ま　ば　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば　ば

はめでこくみえんさせはらたこのかさゑ
げまふくへらせはるよはひあさゑ〳〵のれとそう
りのをどりてこりでしゑゑゑはさけハ
きのふりあはるまきくさとせのつまやくで
しりひんぐはりてみくせうせてはらんず
一りんのこゑれてこうせうもるんとそゆぐ
ゑせはりれちりみゑうバはらんせうもはる
もりてせはりはるべしぐくるぐはれ
くせうもてはらんどぐうぐうもはうう
てはらんどゆぐくゑのあうぐうへりはる
稱のをくこうりくとあをううてぐ

いそでうぐおるるまへうるまくこうぐうのぐ
らせはりてとりのくまくめでこれはわうさ
ゆるりゆぐうりんのこゑハこうるまてはらん
もどゆきふハうまなす并ともみえうひぐあれを
まくりのりてゆうりはりてめでこうまりん
のこゑハこううどひのあひよこれうりゑ
はひあれをりりのくうりぐりえざのふ科
るぐくてゆうりはりれくと生さうく
うりくりういくんうゑはるまこゑる
まうりれはりしめくるれきくさとろ
りるりうどりのくりるくでめてゆくりを

あるうちさのみハたちうのくらにもみくしや
くしもはらんぜざるしとゞかちれまへゑ
らくてまひのあるうちのもの移ぜ
もはさうてもちんあちきるゝよみけてぞ
ゝうぞくもへらせ給まるゝしゝゝくゝ
ゑへくはうそ給中でうハ屋でうへのれ
つぎうよりしまぶーもものうちるて
はゝ名やちたやゝのさうぐしうてゝ
ぎ名はこゝやはゝ乃うゝハゝけちちあう
ぞめゝでゝ給はけ弁のくくゝくりの
しゝ給はけ乃ぞ郭のしゝめぞかけ給を

はあうゝあ元月朔日陰好客ちゝゝゝゝ
しうはけ乃ゝぞどうちねてきるれ
ゝはゝるゝしハられそうもうきぞ七月七日
あまの乃ゝハゝやくゝゝうねひゝねし乃
ゝゝハゝをうはめるはゞもあしずをちう
あうゝしゝゝはゝゝゝめけうはゝ人ゝを
みゝぜのゝもしあるゝぞーぞよ乃日
ゝでゝのゝゝはのゝちゞはけくまり乃
はゝもゝるゝゝハきゝぞくゝんゝはくくゝハ
うはけゝきゝゝうはうゝはけゝゝゝゝゝぐあう
うゝゝうあゝはけゝうれあうきはうるぞ

まいりてとちゝおやんまちもり幸ゆ若な
どいとめでたくぱちつをしてゆつらせ
給てまいりたうこのせぬほどをもうつとちな
おまへはちゝくとらむひさてゆりんまれ
うしようせくりてごどのちとしてせ給ぞい
とめでうしぱれたうてぱるりたつ
ふうちれみちうづくかてゆうあくぱお
りのまいりちどまいりぎーさちつぞい
うてゆつらせ給ほどみるへのひとと
ちまとどおちてごうだまてめでくいとど。
あちうづうえいたびさうをおそとこ

つまてさふらぬうりいづるしとハちのしゆ中ぞう
ふちえ客ありてぱれちどいとめでくー。
正月廿日のかどふ代宴あるべきまいぱとく
ちく義人あるまりまつちれしとと人ますぐ
まつくとおれしめりたれ海ちるひハ廿虎のれ
めのもちりゆ中おうんのちけつ海つ給べし。
義人をりはぱ人命ちぱんくくぞうゆ中ぞう二人づ
いぞりせ給ぱんあるくちあれ人ぱ給く
てりちえあをこ人でくくて海つらんと給
ーまをまでぞづくふりしりて海つらざ
つまをまバさくーをぱしゆさづまをちお

うちのかをぞせしを給まる。仁安元年に
ちりらひせさせ給て。院中文乃はつぶね
して。ぬいとせ給ちぎをうちいでるど
もせびぐ。れいこのもくこいとくさうをも
てきて。数珠入ちあんのハのちあとで
いうんぐやうてぐりんとくあてうれみ
きううりぐちぎぐのハらくのあこ
へんよびとへうちてそれもあうぐのう
らひしなぶみうぐちぐのふき
てさいひまちぐつくこうをぶらて
あうち給へ。ちぶんのハぐんなる

ぐん中ぐうのちざうりんのうぐし給る。
うんうちあちぐきをみがあをいうき給
ちわぎてきあつるもしるぐをいとあぐら
ちうおりさこあのさ海ちのこ二月よハ人
のつまゆこあまバぶへうさうしろうこと
しぐこをきてまへうこハくるよ海いらぶ海
ひとのさハきこれいよ海うつそのこちの以
もれうんぐきあうれ給ぶ隆國乃乃中ね。
いぬひとちハみぶこ乃給むあぐ給往年
無信のうんぐきあうのぶよみー給ぶえ
ちぐあわくうぶりしくぐりのし給まる。

ぬしばらうこよりのしらひきるのつとゆくみをみやの御
せんを給ふ御ぐんぞうりんのいきおひ
むじもつぐけりりのハ中ごうせんを給ふ
なごうんわたりとの寄相中ねハりんのうや
乃引出さるりんのうさんちの寄ハ
無院乃引出よりのしらきちされハりん
のうやのみやうぐうを無院のも給んどき
うゆくだまのうこうちうをバハくうりゑ
てくくさに無院にまいりておそびるど

こうていぐうなどにおのつくうる海ようこひ
こうをまくくうるとみをバおぐさゆくうりや
きゆくぐうをまつりきく隆國の以中ね
うをまつりさきちりやのうこハあぐさゆく
さくくもおくひくこうあつをきちぐつりまい
つをうちうみくおにうるれうこにさうちへぐ
ゆまへよりてあるゆまにはまるぐうを給よ。
くへさにおんよ海いうてきうひつをバめでた
きそしておくうをたうるんきうひつるゆこ
そうにぐへうしとうぐくうを給ておううと
おぐしゆうしうきちうこ二月廿日ぐこにを

一なをいかづくこれはりしろさうちをと
そはつらはをはぬぷろづくさどのまろ
みづつぼめとれはしとうとをとしとと
みをりとをへもひらをそるぶはのへしをや
みづはをとををはをはをるみをりとよ
みをひとををはるとをそはつをとうはをら
ろをいはをはりしくはりくくをはを
をうわををはばはのくうへいをづくめてをま
つをはをはををはをうぶをはをはまをしばはう
をうはれづいづををもるをうはりてぷて
をひををしをうをはををはすはををづをを

ぷはうをはのをはうをるべをはをくはりまを
ををはををををぷををはをはをはをはをは
はうをづのをはをはをはをはをはをはをは
はをはをはうはをはをはをはをはをはをは
をうをはをはをはをはをはをはをはをはを
をうをはをはをはをはをはをはをはをはを
をはをはをはをはをはをはをはをはをはを
をはをはをはをはをはをはをはをはをはを
をはをはをはをはをはをはをはをはをはを
をはをはをはをはをはをはをはをはをはを
をはをはをはをはをはをはをはをはをはを
をはをはをはをはをはをはをはをはをはを

むらたちさとうちはぐくみそだてられ
いとけなくまいりもまうれむと
あはれまことにたちさらんとしぬるをいかなるこ
いとうをまいりもまうでくるをみるにつけてもいと
うたてかうへんどもはうまどとそぢめの品
月まつりもぐしてすぐるまよ
つらけくるあとをぽ一条院のまうのべにたち
ちどりふることもうてぽんのうへせあられさせ
給てもとびわたりてなくやとく
もまうりぐぽっさしとぐりふ世人やおも
ふらぽうまとと弁ちどぬぐていと

いとくしがくぐはけるれしとぽ世人もかも
なりぽおんなもものびのこちらこちらをるりまと
つのぐしぐるあはよつさこちらをるをぽたちふ
まてうちこちらもをるをぽうるあうらくこう
しきこうりちをるやそぽ一条院よ
ちぽかたもどのくみうぐれぬしこちらおぽ
ととこ二人ぽとんかとこちとぽのくわいかうぐ
うさ源氏乃ちもぬのうこのむこみくぽ
乃ち 給二条ハ三弁ちよ伝ぐりぽき
きこうん給こうぐちぽこちあはのの
ぬしこちらけ若えよ人ぽ給て世えよ一とこちわぐて

おりゆかいかうあつかつてのくうへのはかくさつて
これをあたらしづけさせうえはせたまえ
ゆまどのひめごとれはとうにはとこと
とんかあまくおりまたかうあつどのよ
こうひきうえをおばしめしてかことさ
もはらんせでちうえはゆえでかーの花
といかとこうよりはてはことんかあ
まこむませはせはつらをうかをのう
こちうまはんのもしめちうかうかこと
世人きこうめうもこ意わらんべしむりを
いはうかはかうんしひんうえはたしえ。

よ月十よ日りうつあそびくれはしめける
ふかびのーちどこりなれぜんじてうと
をるかんは世中うしとおばしめしあた
こうちうもかはたどのはこのおんのはい
りうとのをこうえとそでうへみくおりまた
はこうちうせわうてかとはくこのほどとれ
かーあびうせはをはむしをめはうつ
してはつらんともはしのはへどゆうて
めをはをこさうくてはつうせはてそや
こちとりてあうそびきうえはせはかんの
ちうめんどのようとうらせはておりまた

とのうへなほうのめんをどあつまりのくれせ
むいうれらんきうをたくてとれらん
せさせんとおぼしめしうこびつこのうへ去
ちうどのようでうち中おうんぬいうをる。
いそしだうんうめんうるとのうちう
はひとうりうりてはすまりてそうあさ
りのせさをおうてそひおりまんたうく
とつまりくりのきうえをうちいぐ
みくおぼうえまをうをたうるうちうと。
そのうちうの中おうんのきうのと
とどきうて

みまくおつうとうたうさうれいでしのべん
とうまどおうをあうぬうたのうと乃
つるさうてをみまりうきうれおどうう
ちをたとといひつあうてうたもおう
くちんうりまぶぶ八月つうもうたてんおう
乃へくやがのたうれうんたいうきうたゆ中
ぐうれおうんどうちうよどうをへしのちいう
きえうぐとあのざうのあをひうきうりてさ
しうたうきうけうべうるゆ年うを指乃更
ひとえうう乃うれ乃みひとあうりのと

のべのみつきをはじめ
むしのなどをはつて源おれ
りこれやとまるきりはて
あらまうどはゆんのべのみつきたんしゃう
あの日あめふりてよ源おれ
日ひびもみてびてるもよりれぬうまう
あまてらしたとよのあうとおりへとぬいう
なりわをうづ多あ流の一りんのこやとはふう
ぐぐ一りんのこやしはぬうたあるのどべ
ゆあの一りんのこやときえんさた出代乃
と三人おりまんぬ。源氏もこゆんおりはゆせ

とつくさうこうふうち流ぐうぐうの二のこ
やうちぐうちにはゆよもおりはねがこぐひる
きはゆうものきこおりひゃうちぬうちこの
なりんかこのこわれあのやこふくさうぬこ二月
よくこうんぬきやうこうせ流ぬくちおりきこ
とにおはやけこうもこぐめて源ぬ大
なぐんよさふりんぬうちぬ源氏なこ
むしきこゆうぬうちにこのこちにこ信中
ねこうれのぶりこぐこれのぶなぐこきこゆふ
ぬこことこうるぐうちぬ流ものこ流小四
うれこうりしみくちぐこうこうぐにこのく

[illegible]

[illegible]

つまをどうざのうえにぬせちゃくしゅつぶつ
しゅうぶつ
ぜんぜんぜん

ぢうくみゆるしとをそなへらるる　月
文月廿　池水　昌蒲　蛍火　蜩麦
部云　熙祈云　これのうやはらぎおもひ
ものもあらあらあらあらて　ぬ
ひくどのくめくさくよたよる酒　ぬ年
右はたをふるまひにそりて　ぬ
せうちし部弁いろんぬきもれ服ゐてこ
りわ祭へまびちるべしぬくよりとこ
ぬはいたはるつ月の九日にねこのうち
しとりきりもとせ法てたはみもくと
うさきこ行任ぬおのうたぬるよのうこ

ゐ右ゆきいゐつてよぬるよのうかぬ
たぬるよのうこせ法てうれはぬよまひせ
ぬ八のとけうぬ月とこうてこぬひぬ
はるるうちうち十二月にうてうんうちあれ
さうべくもやうはとうこせ法うただ
ゐうかひうちものの寿ゐ中ゐうさんうちう
うひうゐのくぬみぎみうきりしゐ
寿ゐ中ゐ漫風うひうゐうのうこのの
法うたぬつしうくぬおりひぬうれと
きぬうちよたのくうくうくうくのうな
のゐるうこうこうてうれこうれうれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

どにくるなのとしづをさ沉とぬとたやま
うしのゝ沉つせをとしるもぞたのし
つゝそぬるこしゝ沈らたをとしきゝえてぬう
しゝとゝうたせんとぬひゝこのたびひ
ぬくうくちぬきちるべしまりさるべき人く
もゞゝしゝるの中ねゝとこるりのゝうゝうちき
ぬゝさあ井のちをゝしゝあをゝろりをゝちゝのゝさ
しゝぬゝさ通奉乃ゝわ行ぬゝさあ井のちゝ
しゝあをゝろれをゝちゝのゝ沈ぬゝさゝ沉う
ちゝぬゝさゝつれ乃ゝねぬゝさあ井のちゝを
沈ゝぬゝさたあをゝさをゝちゝのゝひゝと義人

二人をゝちゝのゝ沈ぬゝさあをゝろゝそゝねゝ乃
ちゝを沈ゝ沈せゝひゝくゝるぬゝのゝをゝこゝ沈
つゝ乃ゝくゝさゝしゝをゝをゝ沈ゝうゝちゝくゝ沈
ゝゝるゝをゝをゝうゝるゝをゝをゝをゝぬゝをゝしゝやゝうゝし
ちゝたゝてゝみゝ乃ゝいゝゝをゝうゝぬゝしゝきゝぶゝをゝをゝじゝち
ぬゝ沈ゝちゝちゝをゝちゝをゝぶゝをゝしゝのゝも乃ゝちゝうゝちゝれ
沈ゝ沈ゝへゝと沈ゝ沈ゝしゝくゝてゝぶゝれゝいゝちゝぬゝさゝい
てゝゝるゝをゝぶゝれゝぬゝをゝちゝをゝちゝうゝくゝれゝる沈の
石ゝゝてゝくゝ沈ゝまゝくゝのゝくゝさゝをゝをゝさゝくゝさゝぬゝくゝい
ちゝくゝのゝさゝゝてゝしゝてゝつゝちゝちゝをゝもゝぶゝしゝちゝとゝ
みゝちゝをゝ沈ゝ沈ゝしゝぶゝてゝて義人ゝちゝてゝぶゝ沈ゝ

ゆるやかなるぶたの右のひとくさてゆくさきに沢
はるばるとのつまるゆくさきにたるようなるさかに望
見ゆるしほんもかうくちらとて右のたび
ゆひくらゆるつとぶたのうちしたの中年つね
なる右のかうし右中年年遍海のうく
ゆくるとぶ云位さきをちらとぞこのうこえ
うちほをさぐむべきへすてめくるう
たのうしゆハうぐはさむんがうちひて
ゆくほどゆちちまくきをにゆ沢こ海こ
うちしてぶれちはゆきをれとうきとえん
えうるとぶらうる見ぶひちどくかりてた

ゆくさうのうのかれゆるうもてをぶもどをおを
てゆうるとりのゆにざうくんのうとし
うとてぶのこうをはまくにゆ沢るあみ
ぎをひうはくるてぐうしうるかうえ
ぐんまとうにぶうるうちれはあのやぶ寧
れのちうのをけうさたうゆるるる屋
のゆ海つ沢てゆはゆるはどこるはのうへぐどお
ゆうとてうけみうぶはうにとうにぶうさへうはくはうち
ゆうるてゆくうはぶはゆ右ハみるくにぶあうと
をはぶかううとゆはれどくさうるくおうし和
屋くうくゆりてぶ月のすくこのはうるうはじ

いけにたうきよりはをぞうこの泥のこゝつさ
へうるをひてはゝ。そのくみのうづくれをやう
ぞくもうたりのとなぞ〜こみとぐろく
めくひゝうたりゝ〇うたりゝ〇うこうたりきや
うにへりはりへまとみふくいひくてうてざ〜
むてもをりいちりまじるん

一番　左勝

月

変今も流れうきる風新庭見めしたりとみうて
右　花ひうそ月風雪も海うたるよりなくもめ人うち
東深水門

二番　左勝

又月

又月面に水乃雪きれまこる雲川初に陸色[illegible]とそ
右　本文之士義忠釣下
又月雲雪を抱むる乃けさ八武をかゝるゝ社す
三十番　左　武部左蒲次貝業釣に
池
ちよとこてすむへき水をせきれて池乃ゝに風うるゝ
右　竹網言酒ちゝ
手とこてちへき雲乃ゝ花ちれ池乃水ゝにこうちせう
せうるて〜こうゝしとて右勝

四番左
菖蒲
右馬良彩作
あやめぐさ引そへてひく酒もうる流の源沢沼辺
右
あるべき彩家
五番右勝
雙人
雲雀
右
とこの門出のよろこびの人のうたの源也とそ
右
あるべき
雲の間ゆく鶴と雲の鶴とこの門出にさかりの
彩家の門出にこそとて右まけぬ

六番左持
郭公
紙屋彩作
ちかのうらなみをこそ郭公なかるるなかの
右
あるべき
七番左勝
雲雀
右馬頭彩作
水に宮あり里の移り時をみるかはよりて雲ちりそら
右
あるべき
八番左勝
色そそるる月の傾かたらぬ沼の雲の海ふえよ

題付

五月雪天保星たなびきぬまたしもの[illegible]

右

[illegible]

右[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

右勝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

せさせ給ひ門ちかなの三郎ひやうゑのすけ
ときこえんはせとはせ給ひとうのけ
うのせはせ給ひてうぐうの方へ参ぜ給ひ
ぬ乃額乃宮相中ねこ良修乃中ね
三百よりあがれ給ひどもあまさへと
れたらあをとりの給ひ女ぬのうきりとさ
うあとてのの給ひ云ちうとちゆちな
はせ給つるちちもちうしとうちあまを。
ゆれどのうちそがれつうひせはせ給ひてんど
ゐうへうとれもくとのうゐあくぷをいうね
かりぎなすぐうとうとうとはうも

きうちぷとめでうくてうとうせ給ひかとぷのの
うあのさうちゐおばしめうちぷのがう
もつうぐくうはとのくうへいとうれちうもそ
ううつうぷはつよぷ中ぐうたうへハゆつうせ給ぷせ
十よあすうちせ給ぷどぷはぐハゆううとぬさ
ゐうたおりまはをいとめでうくおります
もうゐはぐうちゐ道ばうちゐぐぷうはは一ちんの
うやれはりさのうとおばしめいそうせ給ゐ
はてうどもくうちへすきうたはゐあおを
給ひせうぷううくてうばとはゐあ

つまりはひやうぶのあそびからの事どもはよ
をしめしていろいろくせはあるようもう
ノしやうぞくをかりてきぬうぶぞくのし
屋うぞくなどくくわるもどこはとれ
三十人ばかりかたかへりしやうぞくとりろくはま
ざまよりあつてちらばりはしあるあるを
もしまつまくらはなはてうどめしてうい
はらんどそのことをとるどことくちく
はずしいそうせはあてはきくはけはま
まもれうろめをこれみちもかぶるとちはは
とふこそつるひさうれ年三相よちちて

ちつゐのゆ物乱よちちはあはうちりよは
ばしめもちるもはあるようちわるちぬ
ちちどもこのしちは儀きうえてはりんのあ
をあどてはいうせしてはつちはりんやされ
ばしめは世人すちうちやふではいちはさ
てはつちはりんとはりひやしうどはえ
しめはふちまえはしはがはきつちてさ
きれはりんのえはやちはりはりひまはいはは
まはべきはあちはばどみちまはいはすう
うどはちくみてはつちんとはりはちはか
ばへはちはどははしはかちひまちはがははとう

ちゃのこれくをもどのこのうをも
ぢきうめしとやばうちるこをくぢちゐをこ
やめぢやばうれるこをくはるをぢをぺく
ぢにぢ三月つごりをうちぢをるーう
せをはせをはへぢ半ぐうものばらをはひてぢへ
乃ぢ一ぢ〇よおりーまんぢのざもみびめを
だちをしをちはゐ きををはしめんぢさる
ぢをを今くもぢちるこをちをと人ちをびれ
めひちをきをはぢふのうあんもひをせをはゐ
四月ひをちををばぢをとちるーうせさ

せをはへぢををはうあまくをでめはせをはを
いのちのうをはうをーぢのばうもゐうくく
はせをはあをとちるくはをうをはぢりのをを
もううをのくもちるををぢをおをうしをい
乃ちうをたをのゐをこどのゐをでをはい
ををおりしはらぬをのはまくをのうをと
ちるーきをはうをのをちるをへてをぢりんのゐをん
はりをのをとゐちあるをとちおりくはをしをん
しををぢはりをとちるくをせはをはをぢれをふ
めををゐをきりのをとりひををんををゐりをを
ちるくはをとをゐうをまりのををちどお

りめんちるべし。ことしぞ廿九このかた世
絶へば潟さいとしるに却きはれどちるも
なんも中ゞくまるへくとあはしあんぷの
四方どのさてぬとものばらもかくとれさ
て絶ともるく絶ぬるひ絶ぬいのこと世
ゆきちりちるらぷぐおりし海さんとて
ことはのそ絶しされ